

08・二度目のデートにお誘い

『07・耳元で密着吐息喘ぎされながら、はじめての『攻めセックス』する』から数時間後。

とある年の夏。七月二十八日（火）十八時半ごろ。

日本とのとある、かなり寒い地域の田舎町。

天気は雨。かなり激しく振っている。気温は二十三度程度。
少し湿度は高いが、心地よい夏の昼間。

場所は、民宿内、弥映の部屋。

主人公と弥映、一緒に布団に入つて、ぼんやり外の景色を眺めている。

もう触り合つてはいないのに、それでも夢見心地だ。
セックスしていなくても、心がつながっている気がする。

SE1 雨の環境音

【トラック06と07のSE1と同じ音】
【途中から最後まで流す】

〔繰り返して流す〕

〔小さめの音量で流す〕

〔20—28秒ほどまで流してセリフ〕

〔その後、トラック終了まで、もう一段階小さめの音にして流し続ける〕

※同じ音をループさせつつ、『トラック06・07・08が完全に同じ始まり方である』と
言うのを避けるために、別の位置から流す形で始めていただきたいです※

●中央

〔外の光景を眺めながら〕

……まだ降ってる。明日は晴れるみたいだけど。

〔少し間をあけてから〕

そろそろ夕飯の時間だね。着替えないと

主人公、そう言つて立ち上がるをする弥映にしがみつく。

夕食は十九時からのはずだ。まだ時間がある。

まだ弥映と離れたくない。もう少しこうしてみたい。

SE2　主人公が弥映に抱きつく音

【最初から最後まで流す】

● 中央 至近距離

「[急に抱きつかれて驚く]
わ。

【すごく嬉しい。】

『ご飯ギリ』は『ご飯の時間ギリギリまで』という意味
ふふふふ。ご飯ギリまでくつついてたいの?】

〈主人公〉

「うん……♥ まだ時間あるし、いいでしょ?
まだ弥映ちゃんとくつついてたいよ」

● 中央 至近距離

「[※マークまで、ドキドキしながら本音を伝える。
少し声が小さくなる】

うん。あたしも……。
あたしももうちょっとだけ……こうしてたい。

【少し間をあけてから】

ありがとう。

あのね……今日、すつごい気持ちよかつたよ。

ありがとう……』※

〈主人公〉

「……！」

主人公、弥映の言葉が嬉しくてたまらない。

食い気味に返事をする。

〈主人公〉

「私も……！　私も、すつごい気持ちよかつた……♥
弥映ちゃんといっぱいてきて、嬉しかった……♥」

主人公が興奮気味に伝えると、弥映が泣きそうな顔で笑う。
胸が締め付けられて、そのまままた襲いかかりたくなつたが、そうする前に弥映が話し
出した。

8秒ほどの沈黙。

●中央　至近距離

「ドキドキしながら切り出す」

そうだ。あ。あのさ。ちょっと聞きたい事あるの」

〈主人公〉

「なあに?」

抱き合つたまま、弥映が質問してくる。

もちろん、主人公は何でも答えたい気分だ。どんと来いである。

もう弥映に知られて困る事など、何もない。

もし弥映が少しでも何か不安なことがあるならば、主人公はもつと全部見せて、教えて、弥映に安心してもらおうと思つた。

だが、その質問内容は、主人公が想像したものとは少し違つていたようである。

● 中央　至近距離

「ドキドキしながら切り出す」

もしわかるなら、なんだけど。

この辺で、服とか買えるとこ、知ってる？

【少し間をあけてから】

その、あたし、ほんとに無計画で来たからもう替えが無くて。

洗濯機貸してもらえるみたいなんだけど、手持ちじや心許ないつていうか……』

（主人公）

「……♥」

主人公、弥映のその言葉が、とても嬉しい。

それは『明日以降もここに滞在する』という意思表示であると思えたからだ。

もちろん主人公は、明日も弥映がここにいてくれると信じていた。いや、信じたかった。だが、今の二人の関係はとても嫌い。

たとえば『明日は何をしようか？』なんて、小さな質問をしただけで、今の空気を壊してしまいそうで……恐ろしかったのである。

〈主人公〉

「じゃあ明日、お買い物デート行こつか」

● 中央 至近距離

【期待して。

会話の流れから『明日、一緒に買いに行こうか』という意味で言つていると察する。
しかし、それでもまだ確証が持てず、ドキドキしている

えつ？』

だから主人公は、勇気を出した。

弥映から『明日もここにいる』という回答に等しいものを得られたから、次に何かするのは自分だと思ったのだ。

もしかすると、弥映は一人で行きたいかもしない。

でも、断られる事を恐れて『じゃあ行つてらっしゃい』と言つて終わりにはしたくなかった。

『一緒にいたい』という気持ちは自分勝手なものだから、いつも迷惑行為と隣り合わせだ。

だから伝えるのは、いつも怖い。

でも、言わずにいて誤解されるのは、もつと嫌だと思った。

〈主人公〉

「バスに乗つて行けるところになら、ショッピングセンターがあるよ。明日は一緒にそこに行つてみない？」

●中央　至近距離

「すごく喜んで。

『自分達はセックスだけの関係』じゃないと思って、すごく嬉しい】
いいの？』

主人公がショッピングセンターについて説明する前に、弥映が食いつく。
さつきの主人公よりも食い気味に、いつもより早口に、目を輝かせて聞いてくる。

弥映の、質問を質問で返す癖。
こちらから提案した事にすら、許可を求めてくる事。

それはきっと、弥映の自信のなさの表れだ。

主人公は正直なところ、それをなんだかずるいなと思う事はある。

『二度も言わせるなんて』とか『年上なんだから、もつと引っ張ってくれたつていいのに』なんて思う事もある。

でも、弥映は言つた。『自分達は対等だ』と。

だから主人公は大きな声で『その通りだ』と『ずるいところも許すよ』と言う事にした。
弥映といふ時はもう、お互いの年齢は忘れる。

『年上のお姉さんの弥映ちゃん』じゃなくて『自分の恋人の弥映ちゃん』として接する。
そう決めたのだ。

それに、弱くてずるいのは、自分も同じだ。

〈主人公〉

「……まあ、田舎クオリティだけど、その分安いし。

そこのコンビニよりは揃うと思うよ」

こうやつて、早速マイナス面を説明して、予防線を張りまくつている。

●中央　至近距離

「【※マークまで、すごく喜んで】
行く……！　連れてつて。
お買い物デート、する♥」※

〈主人公〉

「ただし、バスで、だけど……。しかも、ちょっとかかっちゃうけど」

●中央　至近距離

「すごく嬉しくて声が弾む。また、少し早口になる。

主人公にデートに誘われて嬉しい。

だが、主人公がなぜか自信なさげなのは気づいているものの、その理由はわからない】
※はしやぎつつも、あまり大きな声にはならないようにお願いします※

いいよバス。バスで行こ。あたしバス大好き。

バス乗って行けるとこになら、服とか買えるとこあるんだ？』

だつて、弥映のような美人で、おしゃれで、都会的な女性を案内するには、田舎のショッ

ピングセンターは心もとない。喜んでもらえるか不安なのだ。

でも、主人公はそこが嫌いじやないし、むしろリラックスできて気に入っている。
たとえば数日前、一人で出かけた時に入ったフードコート。

そこは広い敷地に明るく日が入って、人があまりいなくて、広い机を独占てきて。
割と新しいから綺麗で、すごくいいのだ。

あれを弥映も気に入ってくれたら、素敵だと思う。

どこにでもあるものかも知れないけど、入っているのはチエーンのお店ばかりだけれど。
一緒に『なんか落ち着くね』『ゆっくりできるね』『安くておいしいごはんつていいよね』
と言えたら、きっと幸せだと思ったのだ。

（主人公）

「うん……♥ バス停自体は近いから。行こう？」

明日はお昼もそこで食べようよ。

伯父さん伯母さん達には、先に言つておけば大丈夫だから」

●中央　至近距離

「少し間をあけてから。嬉しくてたまらない。

心のどこかで『自分達はセックスだけの関係だ』と思っていたが、
そうじやないと思える事が嬉しい』

ふふふ。二回目のデートだ。楽しみだね。

【少し間をあけてから。

とても嬉しくて、はしゃぐ】

あー何着てこう♥

【悩んだところで、悩めるほど選択肢はない】

と自分つつこみをしつつも、やはりテンションが高い】
いや、もう選択肢ないんだけど。

【甘えた声で、すごく嬉しそうに】

とにかく嬉しい。ありがと♥

【有頂天で。顔中に、ランダムに、感謝の気持ちのキスを四回する】

ん♥　ちゅっ♥　ちゅっ♥　ちゅ♥】

だから主人公は、弥映がのつてくれて、すごく嬉しい。

明日、実物を見せたらがっかりさせてしまうかもしないが……。

それでも、『明日が楽しみ』と言つてくれる事自体が、とても嬉しかったのだ。

● 中央 至近距離

「少し間をあけてから。

【おずおずと。応じてもらえるか不安】

あ、後（あと）、後（あと）さあ……」

〈主人公〉

「うん？」

しかし、話はこれで終わりではないようだ。

弥映は、まだ主人公に聞きたい事があるらしい。

● 中央 至近距離

「少し間をあけてから。

【※マークまで、おずおずと。応じてもらえるか不安】

今日は、一緒にお風呂も、入ろうよ。

【ちよつと早口で】

普通に。普通に入るだけなら、大丈夫でしょ？」

※

〈主人公〉

「…………！」

その提案がまた嬉しいものだつたから、主人公はまた勇気を出せる。
弥映の理想の恋人になりたい。

そんな気持ちを、もつと実行に移せるようになる。

〈主人公〉

「洗つてあげるね。身体」

●中央　至近距離

「少し間をあけてから。

嬉しすぎて、戸惑つている

あ……♥　いいの？

〔少し間をあけてから〕

身体、洗つてくれんの？」

〈主人公〉

「うん。髪も洗つて。乾かしてあげる」

● 中央 至近距離

「少し間をあけてから。
嬉しそうで、戸惑っている」

髪も？」

〈主人公〉

「髪も。それから、ベビーパウダーもはたいてあげるよ。
全部してあげる。だから、一緒に入ろうよ」

● 中央 至近距離

「甘えた声で。ものすごく嬉しい」

「そんなにしてくれんの……？」

そんな主人公の言葉に、弥映は戸惑っているようだ。
相変わらず、返ってくる言葉は全部疑問形である。

それはとてもまだるっこしくて、そのくせとても甘い。

ずっと質問されたくなる。

延々と『そんなに愛してもらえるのか』と聞かれて『はい』と答え続けたくなる。

〈主人公〉

「……うん。それからね、寝る時も、ずっと手繋いでるから。
朝まで、ずっといちやいちやしてようね」

●中央 至近距離

「少し間をあけてから。
嬉しそぎて、ぐすっと鼻をすする」
そんなのあたし、お姫様じやん」

〈主人公〉

「違うの？」

それでも、これを言うのは怖かつた。

格好つけすぎている気がするし、弥映はお姫様かもしけなくとも、自分がそれに寄り添う存在かどうかは、自信が持てなかつたからだ。

『もしかすると、自分一人で盛り上がっているだけかもしれない』という不安は、常にちらつく。

求めすぎて、気味悪がられてしまつたら。

そのせいで気持ちが冷めて、この関係が終わつてしまつたら。

そんな恐怖を打ち消せるほど、主人公はまだこの関係に自信が持てない。でも……。

● 中央 至近距離

「少し間をあけてから。

嬉しそうで、言葉を失う】

……つ♥

【※マークまで、少しうべきらぼうな言い方になる。

照れて、恥ずかしくて、もじもじと】

だつたら、あんただつて、お姫様だから。

あたし、あんたがしてくれるのより、もつとすごいの、するから。※

【少し間をあけてから。頑張って勇気を出す】

嬉しい。ほんとにありがとう。

【少し泣きそうになつて】

こういうのが幸せって言うのかな……」

〈主人公〉

「そうだよ。これからもずっと、こういうのが続くの」

『こういうのが続く』のを実現できるのか。

それを一緒に『可能なのか』と不安に感じながら。

それでも主人公は頑張りたいと思つた。

それは、弥映が好きだから。

その結果今一生分の勇気を出して、ストックが完全に尽きてもいい。

今発揮できないエネルギーなら、そんなもの一生使い物にならない。
だから全部使う。そう思つたのだ。

●中央 至近距離

「少し間をあけてから。

嬉しそうに、言葉を失う

……これからもずっと?

これからもずっと、あたし、あなたの彼女で、お姫様でいられるの?」

〈主人公〉

「そうだよ……♥」

●中央　至近距離

「少し間をあけてから。

嬉しそうに、言葉を失う】

そつ、か』

●左　ささやき　※マークまでささやく

「少し不穏な含みを持たせて】

ありがとう』※

少し淋しい響きで、弥映が耳元にささやいた。

それが何を意味するのか、主人公にはわからない。

一秒前まであんなに気持ちが高揚していたのに、一瞬で不安になる。
あらぬ事を想像して、深読みして、胸が痛くなる。

でも。

● 中央 至近距離

「全部、すっごい楽しみにしてる。

【唇に、軽く一回だけキスする】

ちゅ♥」

それでも、少なくとも、きっと明日は一緒だ。今、約束したのだから。

● 中央 至近距離

「大好きだよ」

だから主人公は……この言葉を信じる。明日も自分は弥映の恋人で、弥映と一緒にいる事を、信じる。

ここでフェードアウトして終了。